

# 日英語比較によるコミュニケーションの理論から見る 丁寧表現に関する一考察

松倉 信幸<sup>1</sup>

## 要旨

コミュニケーションの理論として、グライスの「会話の格言」を基本的なコミュニケーションの理論として捉える一方で、日本語においては、発話が行われる相手との人間関係により、ことばの選択が行われるため、状況に合わせたよりきめ細かなコミュニケーションのストラテジーが求められる点を述べた。

リーチの「丁寧さの原則」(1983) および「ポライトネス制約」(2003) によって、発話者のコンテクストに応じて、一定の広範囲な会話の内容を網羅することが可能なことから、リーチの両コミュニケーション・ストラテジーは日本語においてもある一定の範囲で適用できるストラテジーであることを詳述した。

また、リーチの後者(2003)のコミュニケーション・ストラテジーを基に、日英語比較の視点から、日英語の表現形式の差異について分析を行った。

## キーワード

コミュニケーション, 発話行為, フェイス, ポジティブ・ポライトネス, ネガティブ・ポライトネス

## 1. はじめに

コミュニケーションのやり取りにおいて、そのコミュニケーションの本質とも考えられる項目がグライスの「会話の格言」に集約されていると筆者は考える。この「会話の格言」は日本語のはっきりと言わない暗示的表現においても、ある程度説明を加えることが可能である。本稿ではコミュニケーションの理論としてはこの「会話の格言」を基本的な根本原理として捉え、日英語比較の中でも、特に表現形式の差が明確な間接発話行為および丁寧表現を中心に、リーチ(Leech 1983:102)の「丁寧さの原則」およびリーチ(Leech 2003:109-112)の「ポライトネス制約」に基づき、日英語比較の視点から、表現形式の差異について分析を行う。

## 2. グライスの「協調の原則」と「会話の格言」

---

<sup>1</sup>国際人間科学部国際学科 英語学(English Linguistics)

日々のコミュニケーションのやり取りにおいて、暗黙のうちに守らなければならない基本項目というものがある。この項目を取り纏めたものがグライスの提言であると言えよう。グライスは会話のやり取りでは双方の会話の相手が相互に協調的に、協力し合って会話を成立させる「協調の原則」(Cooperative Principle)を提案した。この「協調の原則」について、具体的な「四つの会話の格言」(Cooperative Maxim)を提案した(Grice 1975;1989)。この理論は表現形式というよりも、何を伝えたいかという話の中身が問題である。下記の日本語訳は日野(2009:100)によるものである。

(I) 量の格言 (Maxim of Quantity)

話者は必要かつ十分な情報を知らせなければならない。

(II) 質の格言 (Maxim of Quality)

話者は真実を伝えなければならない。

(III) 関係の格言 (Maxim of Relation)

話者は関係のあることを言わなければならない。

(IV) 様態の格言 (Maxim of Manner)

話者は明確に言わなければならない。 (Grice 1975;1989) [訳：日野 2009:100]

これらの「四つの会話の格言」はお互いがコミュニケーションを行う際に、暗黙のうちに守られるべきコミュニケーションに不可欠ないわば方程式と言っても過言ではない。言い換えるとすれば円滑なコミュニケーションを行う際には少なくとも、これらの会話の格言に違反していないということが求められよう。下記の会話の(1)によると、母親は、上記の「量の格言」に違反して、娘の質問に対して必要以上に詳しい情報を与えているように思われる。しかし、この会話が成立しているのは、母親が「量の格言」に違反していないはずだという前提で、娘は自分に対しても少しはそのように(陽子ちゃんのように)なりなさいと言っていると捉えることができる。また、(2)では、作家は上記の「関係の格言」に違反して関係のないことを言っていると思われるが、作家はあれこれやっかいな事情があって、まだ原稿はできていないと捉えることができる。

(1) 母親：山田さんとこの陽子ちゃん、覚えてる？

娘：うん、金鯱女子大行ってんだっけ。

母親：今年卒業してね、それは気立てがよくて、よくきがつくし、

礼儀正しい子よ。 (町田 1995:123)

(2) 出版社の人：先生、原稿はおできになりましたでしょうか。

作家：ちょっと子供の具合が悪かったり、親類に不幸があったりして。(町田 1995:124)

この会話の格言は通常会話をする人が暗黙のうちに守らなければならない原則と捉えることができよう。しかし、より改まった丁寧な表現を用いる場合には、上記の会話の格言では対応できない。日本語においては、発話が行われる相手との人間関係により、ことばの選択が行われるため、状況に合わせたコミュニケーションのストラテジーが求められる。

### 3. 直接発話行為と間接発話行為

発話行為(speech act)は話者が文を発する行為を言い、対人関係機能を基軸とする。ここでは表現形式が問題とされ、相手に対して、より適切な表現とは何かという項目が重要視される。Austin(1962)はこの発話行為の基本的な側面を三つに区分して、そのうちの一つが上記の発話行為といい、二つ目が実際にある意図、すなわち命令、約束、依頼、質問、報告等、発話内の力(illocutionary force)を伴う行為を発話内行為(illocutionary act)という。最後の三つ目はこの発話内行為を媒介にして、相手から結果として何か心理的に影響(脅かし、喜び、楽しみ等)を与える行為で、発話媒介行為(perlocutionary act)と呼ばれる。今井(2014)によると、発話内の力(illocutionary force)と発話されたことばとの関係は直接的なものがある。これを「直接発話行為(direct speech acts)」と呼び、下記の(3a)および(3b)の例がこれにあたる。

(3) a. I promise that I'll vote for the measure.

b. I promise to vote for the measure.

(その議案に賛成投票すると約束します。)

(今井 2014:98-99)

もう一方で、発話内の力と発話された文の形式との関係が直接的でないような発話行為は間接発話行為(indirect speech acts)と呼ばれる。日本語の間接発話行為は「もらう」、「けど」、「かなあ」という表現を用いて下記の例のように、直接的ではなく、遠慮した表現であるので、これらの間接発話行為の表現で問われると、相手から拒絶の返事はほぼ返ってこない。

(4) a. 塩をこっちにまわせる？

b. 塩をこっちにまわしてもらえる？

(西光 1997:269)

(5) 塩をこっちにまわせるかなあ。

(6) ごみを出してほしいんだけど。

(西光 1997:270)

### 4. 丁寧表現の日英語における表現形式の違い

英語の丁寧表現は通常、助動詞の could および would を用いるのが主である。しかし、日本語では名詞に「お」をつけて「お花」、「来る」は「いらっしゃる」などのような言語

形式による操作が必要であり、しかも相手によって、表現形式を選択しなければならない。もっとも英語においても、下記に丁寧さの段階性が見られる。まず、下記の(10)から(12)の間接表現が丁寧表現に該当する。これらの事例から丁寧さには段階性が見られ下記の(7)から(12)に至るにあたって、丁寧さの度合いが高まり、下記の中では(12)が最も丁寧な意味合いの高い表現であると考えられる。

- (7) Open the door.
- (8) I want you to open the door.
- (9) Will you open the door?
- (10) Can you open the door?
- (11) Would you mind opening the door?
- (12) Could you possibly open the door?

## 5. 丁寧さの原則

「丁寧さの原則」(politeness principle)を提示したのはリーチ(Leech 1983:102)である。この「丁寧さの原則」はブラウンとレビンソンのアイディアに由来すると言われている。リーチのこの公理は協調の原則と他者に対する配慮と非難をどのように取り扱うかという考え方に基づいている。即ち集約すれば、この「丁寧さの原則」は次の三つの要点からなる。①他者への負担および非難を最小限にする。②自己への利益および称賛を最小限にする。③自己と他者との意見の不一致および反感を最小限にする。そして、リーチはこの「丁寧さの原則」はグライスの「会話の格言」を補完するものであると考えた。下記の日本語訳は小泉(2001:128)によるものである。

### (I) 気配りの公理(Tact Maxim)

- (a)他者への負担を最小限にせよ [(b)他者への利益を最大限にせよ]

### (II) 寛大さの公理(Generosity Maxim)

- (a)自己への利益を最小限にせよ [(b)自己への負担を最大限にせよ]

### (III) 是認の公理(Approbation Maxim)

- (a)他者への非難を最小限にせよ [(b)他者への称賛を最大限にせよ]

### (IV) 謙遜の公理(Modesty Maxim)

- (a)自己への称賛を最小限にせよ [(b)自己への非難を最大限にせよ]

### (V) 同意の公理(Agreement Maxim)

- (a)自己と他者との意見の不一致を最小限にせよ [(b)自己と他者との意見の一致を最大限にせよ]

## (VI) 共感の公理(Sympathy Maxim)

- (a)自己と他者との反感を最小限にせよ [(b)自己と他者との共感を最大限にせよ]  
(Leech 1983:102)[訳：小泉 2001:128]

## 6. フェイス

対人コミュニケーションにおいて、自分と相手の双方の面目、面子（メンツ）を保つことが求められる。これによって円滑なコミュニケーションが図られ、双方のメンツを保つことで共同社会において、友好的な関係を継続することができる。このメンツと同じ意味の概念はフェイスと言い、米国の社会学者ゴフマン(1967)に始まり、ブラウン&レヴィンソン(1987)において対極的な二つの face が提唱された。その一つがネガティブ・フェイス(negative face)で、もう一つがポジティブ・フェイス(positive face)である。前者は他人に私的な領域を邪魔されたくないという欲求であり、後者は他人から自分が認められ、好かれないという欲求のことである。さらに相手や自分のフェイスを傷つける場合があり、そのことをブラウン&レヴィンソンは「フェイス侵害行為(face threatening act: FTA)」と呼んでいる。

相手に好感を持ってよく受け入れられたいとするポジティブ・フェイスと、相手に邪魔されたくないとするネガティブ・ポライトネスにおいて、前者の相手の評価を考慮するのがポジティブ・ポライトネスであり、もう一方で自分の欲求を考慮するのがネガティブポライトネスである。

リーチ(2003:109-112)はポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの区別は発話行為のタイプによって決定されるという「ポライトネス制約」を提案した。この理論は一つの制約が二つのペアより構成され、五つのペア項目はすなわち「欲求」、「資質」、「義務」、「意見」、「感情」からなっている。下記奇数番号はポジティブ・ポライトネス、偶数番号はネガティブ・ポライトネスを表す。下記の日本語訳および例文は福田(2013:47-49)によるものである。

- (I) 他者の欲求に高い価値をおくこと。(制約の名称：寛容、発話行為：行為拘束型)  
「喜んでお手伝い致しますしょう。」
- (II) 自分の欲求に低い価値をおくこと。(制約の名称：機転、発話行為：行為指示型)  
「すみませんが、ソースを取っていただけますか。」
- (III) 他者の資質に高い価値をおくこと。(制約の名称：是認、発話行為：賛辞)  
「テニス、本当にお上手ですね。」
- (IV) 自分の資質に低い価値をおくこと。(制約の名称：謙遜、発話行為)  
「いえ、何年経っても相変わらず下手です。」
- (V) 他者に対する自分の義務に高い価値をおくこと。(制約の名称：他者(o)に対

する話し手(s)の義務、発話行為：謝罪・感謝)

「皆様方に、衷心より御礼の言葉を申し述べます。」

(VI) 自分に対する他者の義務に低い価値をおくこと。(制約の名称：話し手に対する他者の義務、発話行為：感謝・謝罪に対する応答)

「いえ、どういたしまして。おやすい御用です。どうぞご放念ください。」

(VII) 他者の意見に高い価値をおくこと。(制約の名称：同意、発話行為：同意・不同)

「まったく同感です。」「もう一度よく考えさせていただきます。」

(VIII) 自分の意見に低い価値をおくこと。(制約の名称：意見・寡黙、発話行為：意見表明)

「一言卑見を述べさせていただきます。」

(IX) 他者の感情に高い価値をおくこと。(制約の名称：共感、発話行為：感情表明)

「息子さんの大学ご入学、さぞかしご家族でお喜びのことと拝察致します。」「あなたのその悔しさ、本当にわかるわ。」

(X) 自分の感情に低い価値をおくこと。(制約の名称：感情・寡黙、発話行為：感情抑制)

「この状況に、内心忸怩たるものがあります。」「つい舞い上がってしまってすみません。」

(Leech 2003:109-112)[訳：福田 2013:47-49]

上記の理論によって、相手に対する配慮と対人コミュニケーションにおけるより細かい対応が可能になってくるのは自明である。上記の(I)から(X)の項目の日本語の例から、日本語の敬語において、この理論は有益と考えられる。例えば、接客をする際に相手にお菓子をすすめる場合、英語では下記(13)の例のように、「これはおいしいのだから是非食べてみなさい。」と積極的である。これとは反対に日本語は(14a)および(14b)のような控えめな否定表現である。上記の「ポライトネス制約」では、英語の(13)の例が当てはまる項目で近いと言えるものは(I)と言えよう。もう一方で日本語の(14a)と(14b)は(II)と(VIII)に該当する。同様に(16)では日本人はしばしば自分の身内のことを謙遜して、「愚妻」などとへりくだったものの言い方をする場合がある。日本人は謙虚であることが美德であると考え、他人に対して自己を主張し過ぎたり、自信たっぷりの態度は嫌われる。これに対して、アメリカ人は身内のことを控えめに表現することはあっても、日本人のようなへりくだったものの言い方はしない。下記の(15)の例ではむしろ積極的に褒めちぎる場合すら見られる。この例でもやはり英語を上記の項目に当てはめると(IX)になるが、日本語の方は(IV)および(VIII)に該当すると言えよう。

(13) You must eat this cake.

(14) a. お口に合わないかもしれませんが、どうぞこのケーキを召し上がってください。  
b. 何もごさいませんが、どうぞこのケーキ召し上がってください。

(15) She loves to cook and is planning to fix something special for you.

She wants to meet you.

(Nancy 1982:18)

(16) 妻は美人ではありませんし、料理もあまりうまくありませんが、遊びに来て下さい。

## 7. 日英語のポジティブ表現とネガティブ表現

通常何気なく用いている表現において、英語は肯定文でポジティブ表現、日本語は否定文でネガティブ表現という例がしばしば見られる。下記のように日英語において、肯定と否定とでは全く逆になる。英語では疑問文および否定文においてポジティブ表現であるのに、日本語ではこれと反対にネガティブ表現である。

(17) a. Keep off the grass.

b. 芝生に入るな。

(18) a. Members only

b. 関係者以外立ち入り禁止

(19) a. Do to others as you would be done by.

b. 己の欲せざるところを人に施すなかれ。

(20) a. Do you have any questions?

b. 何か質問はありませんか。

上記の例に加えて、下記に見られるように、イディオムや最上級を用いた表現にも、英語はポジティブ表現、日本語はネガティブ表現になる。

(21) a. He is the last person to betray others.

b. 彼はとても人を裏切るような人物ではない。

(22) a. This is the longest bridge I ever saw.

b. こんなに長い橋は見たことがない。

(23) a. Who knows.

b. 誰も知らない。

英語のポジティブ表現に対して、日本語はネガティブ表現になる日本語の否定的な発想は金田一春彦(1975)によると、「われわれ日本人には、昔から、どういう場合には発言するな、という消極的な教えばかり多くて、積極的にどうせよという教えは少なかった。そのために日本人は、のびのびと発言できないことが多かったようである。」と述べている。日本人は和を重んじるため、自己を滅却して、人前で話す際には相手を配慮して相手を持ち上げて、時として自己を卑下して見たり、自己を否定したりするのである。

## 8. ポジティブとネガティブの丁寧表現

通常ポジティブ・ポライトネスの特徴は「他人に受け入れられたい」、「他人によく思われたい」という欲求から、形式的なものの言い方よりも直接的表現によって、相手との心理的距離を縮め、親密さによる共感と連帯感を効果として求める表現である。

(24) 「喜んでお手伝い致しましょう。」

(25) 「テニス、本当にお上手ですね。」

(26) 「息子さんの大学ご入学、さぞかしご家族でお喜びのことと拝察致します。」

(27) 「皆様方に、衷心より御礼の言葉を申し述べます。」 (福田 2013:47-49)

(28) Let's start fixing dinner.

(29) Why don't you take me out to dinner tonight?

(30) If you help me today, I'll help you tomorrow. (北尾 1993:34)

他方でネガティブ・ポライトネスは「他人に邪魔されたくない」、「他人に踏み込まれたくない」という欲求を考慮に入れた表現である。表現形式は間接的表現によって、相手との心理的な距離を保ち、これによって相手に敬意を払う丁寧表現である。なお一層遠回しな婉曲的表現が用いられる場合も見られる。

(31) 「すみませんが、ソースを取っていただけますか。」

(32) 「つい舞い上がってしまってすみません。」

(33) 「いえ、何年経っても相変わらず下手です。」

(34) 「いえ、どういたしまして。おやすい御用です。」 (福田 2013:47-49)

(35) I'm sorry to bother you, but could you possibly come over and help me with preparing for the party?

(36) Tommy: Would you like to go to the movie tonight?

Emily: I'm sorry, but I have another appointment. (中島 2012:119)

## 9. 丁寧表現としての日英語のほめことばの比較

英語で表現されるほめことばはよく誇張して言うのであるが、それとは反対に日本語では相手よりも自分を下手にして謙遜して言う表現が見られる。上記で述べた(16)の例にも該当する。下記(37a)の英文の例では、相手を褒めちぎっている。

(37) a. "I don't know what you've been up to but you look terrific," said her friend,



approvingly. “Like a million dollars!”

b. 「あなたに何があったのか知らないけど、すごくきれいよ。100万ドルの価値があるわ。」  
(Kenneth Harper, *Falling in Love*) [訳：津田 1994:82]

(38) 母親 A：おたくのお嬢さんはおできになるからいいわねー。うちの子なんて、できなくて本当にこまるわ。

母親 B：まあ、とんでもないわ。おたくのお子さんのほうがおできになるのに。

(39) A：素敵なお家ね。お宅に比べたら、うちなんてみすぼらしくて。

B：そんなことないわ。お宅の方がずっと広くて、豪華だわ。 (津田 1994:85)

上記(38)と(39)の日本語は、相手を褒めて自分の側はへりくだったものの言い方をすれば儀礼的なやりとりで、しばしばよく用いられる表現である。英語の(37a)は積極的に褒めちぎる誇張表現のため、ポジティブ・ポライトネスに相当する。もう一方で、日本語の(38)は相手(おたくのお嬢さん)を積極的に褒める一方で、自分の側をへりくだり、相手よりも自分の側(うちの子)を下においた謙遜的表現形式のため、一見するとポジティブと思うが、実際はへり下った謙遜的表現のためネガティブ・ポライトネスに該当すると言えよう。

## 10. 丁寧表現としての緩衝的垣根表現

日英語において、「残念ですが」と先に相手に共感の気持ちを表して、ワンクッション置いてから、次に否定的な表現を続けるのが緩衝的な垣根表現である。このワンクッションが垣根の機能を果たして、相手に直接、否定的な事柄を伝えるのを避けるための表現である。

(40) We regret to say that your offer is not acceptable. (Wagner *et al.* 1991:122)

(41) 残念ですが、貴社のオファーはお受けできません。

(42) I'm afraid I won't be able to accommodate your request. (島岡 1996:168)

(43) 申し訳ありませんが、あなたのご要望にお応えできそうにありません。

上記(40)～(43)の例では実際に否定語を用いているが、下記(44)と(46)の例では‘unable’および(45)と(47)の例では「できかねます」を用いて、婉曲的に相手に否定的な内容を伝える丁寧表現である。

(44) We regret to inform you that we are unable to offer you the job.

(Raymond 1994:110)

(45) 残念ですが、当社は貴社にその仕事をオファーできかねます。

(46) To our regret, we are unable to accept your order at the price required:

£25 per 1,000.

(King 1984:49)

(47) 残念ですが、当社のご要求の 1,000 個につき 25 ポンドの値段では貴社のご注文をお引き受けできかねます。

## 11. おわりに

コミュニケーションの理論として、まず出発点としてグライスの「会話の格言」を基本的なコミュニケーションの理論として捉える一方で、日本語においては、発話が行われる相手との人間関係により、ことばの選択が行われるため、状況に合わせたよりきめ細かなコミュニケーションのストラテジーが求められる点を述べた。

リーチの「丁寧さの原則」および「ポライトネス制約」によって、発話者のコンテクストに応じて、一定の広範囲な会話の内容を網羅することが可能なことから、これらのリーチのコミュニケーション・ストラテジーは日本語においてもある一定の範囲で適用できるストラテジーであることが判明した。今後はポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスにおける日英語比較にさらなる研究の余地があることも判明した。この点は今後の課題としたい。

## 参考文献

福田一雄(2013)『対人関係の言語学 ポライトネスからの眺め』開拓社 47-49.

Grice, Paul (1989; 1975) *Studies in the Way of Words* Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press 26-28.

伊藤達也・松倉信幸・市島清貴 (2016)『言語コミュニケーションのこれから』朝日出版社.

金田一春彦 (1975)『日本人の言語表現』講談社.

King F. W. & Ann Cree (1989) *English Business Letters* Longman 49.

Kenneth Harper, *Falling in Love*[訳: 津田早苗 (1994)] 82-85.

北尾謙治 (1993)「英語社会の言語コミュニケーション」『英語コミュニケーションの理論と実際』桐原書店 34.

小泉 保(2001)『入門語用論研究—理論と実践—』研究社 128.

Raymond Murphy (1994) *English Grammar in Use* Cambridge University Press 110.

島岡 丘 (1996)『英会話使い分け辞典』開拓社 168.

町田健・靄山洋介 (1995)『日本語教師トレーニングマニュアル3 よくわかる言語学入門 解答と演習』バベル・プレス 122-124.

松倉信幸 (2002)「否定の意味と機能」『日本英語英文学』第12号 61-73.

松倉信幸 (2000)「日英語の否定表現の比較と異文化コミュニケーション」『鈴鹿国際大学紀要 CAMPANA』No. 6 161-169.

中島信夫 (2012) 『語用論』 朝倉書店 119.

Nancy Sakamoto & Reiko Naotsuka (1982) *Political Fictions* Kinseido.

Nicholas Allott (2010) *Key Terms in Pragmatics* [訳：今井邦彦監] 開拓社 98-99.

日野資成 (2009) 『ベーシック現代の日本語学』 ひつじ書房 100.

西光義弘 (1997) 『英語学概論』 くろしお出版 269-270.

Wagner J. *et al.* (1991) 『The Business Letter 正しい商用英文手紙の書き方』 有斐閣 123,  
184.

# A Comparative Study on Politeness between the Japanese and English Languages from the Viewpoint of Communication Theories

Nobuyuki MATSUKURA

## Abstract

Although the cooperative maxims proposed by Grice (1975:1989) are considered a fundamental theory of communication, they are not comprehensive enough to investigate Japanese politeness.

Other communication theories have been proposed. For example, there are the politeness principle and the politeness restrictions proposed by Leech (1983; 2003). Japanese politeness can be explained using both theories. Above all, communication contexts are carefully dealt with by the latter.

The utility of these communication theories will be discussed, in regards to comparative study between the Japanese and English languages.

## Keywords

communication, indirect speech acts, politeness, positive politeness, negative politeness